
きみは先生と恋をした

mugi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きみは先生と恋をした

【コード】

N4040N

【作者名】

mugi

【あらすじ】

大学の教員との不思議な別れ

桜の嵐の中で別れた人がいた。

「そう、留学するのね。おめでとう」

そのひとは薄い赤色の口紅をした唇をゆったりと微笑ませた。

落ち着いた、うつくしい人だった。

「帰ってくるのは、4年後です。先生」

大学内にあるカフェのガラス張りの席は彼女の特等席だ。

行き交う学生たちがよく見えるからだと聞いたことがある。

「じゃあ、私はもう結婚しているかもしれないわね」

ゆったりとカップの縁を白い繊細な指がなぞった。

「もし招待したら来てくれるかしら？」

俺は思わず苦笑いした。

「酷な人ですね。先生は」

彼女の首を傾げてみせる仕草が好きだった。

「俺の気持ちを知っているくせに」

こんな綺麗な人には、想いを寄せる男なんて何人もいただろう。

けれど、誰も彼女をものにすることはできなかった。

「あら。初めて知ったわ」

「嘘をつくのがお上手だ」

くすくすと彼女は口元に片手を当てて上品に笑った。

「本当に知らなかったのよ？」

「どうだか」

俺はこのままこの人に告白しないまま海外に発つのだろうか。

「そろそろ時間なので、いきます」

「そう」

外に出ると桜が満開だった。

強い、風が吹いた。

ばらばらと風は花弁を盛大に散らしていく。

今なら言えるんじゃないかと思った。

「先生！抱き締めていいですか！！」

俺は風に負けないように大声で言った。

彼女は頬を桜色に染めて言った。

「…はい！」

俺は数歩、近づいて彼女の細い体を抱き締めた。

彼女の清潔な匂いがした。

風に消えそうだった。

桜が舞っていた。

俺はこの温もりを忘れないと思った。

結婚式の招待状も来ないまま、4年が経った。

帰国して、多少の期待はしていた。

彼女は幸せなのだろうか。

良い夫を持ち、子供たちに囲まれているだろうか。

まだ、うつくしいだろうか。

けれど、大学を訪ねても彼女はいなかった。

彼女の実家を訪ねたら、あの時のまま遺影の中に収まっていた。

彼女の母は泣きながら、彼女が俺宛に書いた手紙を渡した。

『この手紙を読むとき、あなたの前に私はいなくなっているでしょうね。』

ですから、先生の本当の秘密を教えてください。

私は奥手で、男の子に抱き締められたのはあなたが初めてでした。あなたを待とうと思ったこともあったけれど、待つことができませんでした。

『こんなさよならの仕方を許してね』

そして彼女は桜に消えた。

(後書き)

読んでくださってありがとうございました。

良かった点、悪かった点ご遠慮なく感想をお寄せください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4040n/>

きみは先生と恋をした

2010年10月10日04時56分発行